

博士學位申請論文

平治物語の成立と展開

概要書

申請者

日下力

博士學位申請論文

『平治物語の成立と展開』概要書

申請者・日下 力

本論文は、軍記物語の一作品たる『平治物語』が、どのような性格と内容のもとに誕生し、増補・改作の手を経てどのような変貌を遂げたかについて、他作品との関連や時代の思潮等を視野に収めつつ、論究したものである。以下、目次にそって概要を記す。

序 戦乱と表現のあり方をめぐって
戦いに対する表現者の姿勢に焦点を合わせ、『愚管抄』と『平治物語』との異質性を検証し、軍記物語の場合、事件への人々の歴史的共有感覚が表現意欲の原動力にあり、それが作品の変貌をもうなしたものと捉える。成立と展開という二側面から作品研究がなされるべき必然性を説く序。

前篇 平治物語の成立

第一章 古態本の確認

古態本と目される陽明文庫本の上中巻、学習院大学本の中下巻について、前者の上巻と中巻とは各々別種とする高阪公子説。この系統の伝本を後出本として位置づけようとする竺梁泊説の両説を検討、論拠への疑問を提示し、平家物語の如くの影響が他の諸本に比べて最も希薄で、突出的にしか現われない点を以て、古態本と再確認したものである。

第二章 物語の基本的性格

第一節 古態本の志向

後出の金刀比羅本との比較を通し、初期の作者は、当初、朝廷擁護の立場から物語を構想したにも拘わらず、古態本ではその構想が屈折している実態を論証、志向のゆえとして指摘する。具体的には、謀叛側人物を否定的に、追討軍や反謀叛の人物を好意的に描こうとする姿勢が途中で変質し、謀叛に与した源氏一族に関する記述が増加していくことを論じた。

第二節 笑いの考察

古態本中の笑いか、謀叛の張本人たる藤原
 信頼の愚かしさを描くところに派生する笑い
 と、謀叛側を揶揄嘲笑する藤原伊通の笑う
 笑いとで占められてゐることとを指摘、朝廷擁
 護の立場にあつた、つまり王朝体制への帰属
 意識を濃厚に持った作者であつたことを鮮明
 にする。更に、伊通の歴史上の実像を追ひ、
 物語がかなり忠実にそれとを投影させてゐる事
 実をも明らかにし、笑いに関しては、後出の
 金刀比羅本に至ると、作中の特異なあり方が
 全く消失してしまふことに論及する。

第三節 義朝像形象の問題

最初に、地の文で作者の使用してゐる敬語
 が、反謀叛側人物に多用され、謀叛側人物に
 関しては僅少であるという敬語使用の偏向か
 ら、反乱を否定的に描こうとする作者の姿勢
 を再確認し、その姿勢が、敗者の戦場におけ
 る実際の体験談を作品の素材として入手した
 時、少なからず動搖しはしなかつたかと推測
 することに作中の志向のゆゑの初見を見ようとす

る。体験談は、具体的に、源義朝の側近であ
った後藤実基が伝えたところから、その五捕
出し、実基の生活基礎を洗い出して、作者の
もとにその体験談が届く蓋然性を追究した。

並節 金玉丸の報告談考

義朝が逃避行の途次で暗殺された一部始終
を、愛妾常葉のもとに参向して語る金玉丸の
長大な報告談について、それの筆述の文体で
あり、前後の内容と矛盾齟齬する要素を含む
ことを検証。その要素が却って当該話の真実
性を証明するものであるところから、彼の実
際の体験に端を発すると見る。

第三章 常葉譚の撰取

第一節 独立譚としての措定

常葉の都落ちから大波羅出頭に至る一連の
話が、本来、平治物語とは別箇に創出さ
れ、享受されていったことを説く。作中にそれ
を撰取した際の痕跡を指摘。成立の背景には
清水寺の観音信仰があり、同寺の盲人信仰の
実情を明らかにして、盲女の語り物であった

かと推測する。

第二節 文学性の解析

都落ちの段と六波羅出頭の段とを分析。前者では、幼子さまもって都落ちする常葉の苦難と懊悩が時間軸にそって巧みにアレンジされ、後者では、生捕られた老母の命が我が子の命かという二者択一を迫られた彼女の表と裏の心理が巧みに描き出されている様を読みとく。それは、『平治物語』に撮取される以前に獲得されていた文学性であると見る。

付節 読みの方方法に関して

山下宏明氏が、常葉の話を独立譚であつたとする拙論について、作品の素材の腑分けに過ぎないとの批評したのに対し、作品の読みは素材の段階から保有して、いに文学性にも柔軟に対応しつつ、実態に即して、全体に及ぼすものであることと主張したものの。

第四章 改変増補の過程

第一節 悪源太雷化話の作出

義朝の長男悪源太義平が処刑された後に雷

となり、切手であった難波経遠と雷死させた話か、平家物語との保元物語の影響下に作出増補されたものであることを立証。作出の背景に、鹿谷事件の主謀者藤原成親と、経遠の兄経房が惨殺した為に一族が報いを受けたと『平家』の語る一件があり、難波氏には残忍さゆえに報復される一族というイメージがかつまるとしていたところから、この話の案出されたのであろうと推察する。

第二節 盛康夢合せ譚の増補

頼朝流罪の際、その将来を夢合せする源盛康なる人物の話か、後日の増補になることを接合部分の不自然な叙述から論証し、原話は盛康の土地拝領由来話であつたろうと論ずる。夢合せの場所として近江の建部神社が選択された背景や、最後には冷淡な筆致で盛康を描く増補作者の意識をも問題とする。また増補部分を除いてみれば、物語の原作は現存本より少ない、上下二巻構成が母と推論する。

第三節 後日譚部の性格

後に付加されたと思われる義経の奥州下りの話や頼朝による天下掌握の話について、それらは伝承の集大成によって成り立っている。見、具体例として、様々な土地に残る佐藤兄弟の母尼公の伝承、頼朝と義朝と琵琶湖の湖北の地と伝承上で結いつく傾向のあることの背景に考察を加える。

第五章 成立期と作者圈

第一節 待賢門合戦の表現と成立期

悪源太と平重盛との騎馬戦を描く名場面たる待賢門合戦の表現が、平治の乱当時の大阪裏が崩壊し去った後の一・二・三〇年前後以降でなければ成り立ちえぬことを論証。天皇の普段着込に関する知識や、謀叛側に一旦与した藤原経宗の扱われ方等から、右の年代以降が物語の成立期として各々と判ずる。当時の天皇は平氏の血を引いており、宮中には平氏人脈が復活、世は安定期を迎えていた。その二とが物語の性格に反映していることを推する。

第二節 作者圈推考・基礎篇

作者が特別な関心を見せている伊通を中心
に、その人脈を探る。作中で、謀叛と崩壊に
導いたとして好意的に描かれていた葉室家一
族（光頼・惟方・成頼）とは縁戚関係にあり
そこは會孫の代まで続く。この外、好意的筆
致の認められる藤原信西や摂関家の忠通、平
氏一門ともつながりがあり、作者圈は、伊通
の子孫周辺に蓋然性が高いことを論ずる。

第三節 作者圈推考・発展篇

成立期が承久の乱の後であるところから、
当時の状況を追究。葉室家は乱の犠牲者とな
く出して逼塞状態に等しく、その周辺には作
品を生み出すほどの精神的余裕がなかった。
うと見る。伊通子孫の中では、高倉家を称し
た會孫の経通あたりが注目される。『明月記』
の記事等から探りを入れる。決定的証拠はな
いながら、新時代にもそれなりに遇されてお
り、作者圈の表徴らしきものが認められなく
はないと説く。

第大章

『保元物語』と『平治物語』

第一節

『保元物語』の世界

天皇と土皇のもとで源平の武士が蹴った保元
の乱を題材とする物語世界が、御国争いの
物語化・悲話の創造・英雄後朝の造型という
三つの柱から成り立っている。と分析、超人的
な明るい為朝像を造型した作者には、『平治
作者と異なる楽天的視座があり、それが笑
の質の違いにも現われていると捉える。

第二節

『保元物語』の作者と

『平治物語』の作者

同一人物に対する敬語の使用が、場面に応
じてあつたりなかつたりする実態を、『承久
記』、『平家物語』、『太平記』について了
証。そこに作者の情動の変移を指摘し、『保
元』の場合はその変化が多いのに対し、『平
治』は謀叛側には敬語を用いず、反謀叛側
には用いるという姿勢が一貫して維持され
ていると説く。もって、両作品の作者の異質
性を論じた。

第三節 『平治物語』から『保元物語』へ

両作品の戦乱発生部・合戦部・結末部の叙述のあり方を比較対照、『保元』の叙述構造が多層的であるのに対し、『平治』は単一志向性を保持しており、それは王朝体制帰属意識に支えられたものであったと捉える。『保元』の為朝は、皇位を我か意志で左右しようとする言動が描かれるが、『平治』にはとうした表現を生む素地はなく、古代的な意識の浅深という一尺度をもちてすれば、『平治』から『保元』へとという路線で両作品を捕捉することも可能なことを説く。

後篇 平治物語の展開

第一章 絵巻と『平治物語』

第一節 合戦絵巻と軍記文学

現存の合戦絵巻と共に、記録上に書き留められていた絵巻制作や享受の記事を検討、中にせににおける合戦絵巻の展開を跡づけて、軍記文学が世に迎えるべく、た実態との関連に説き及ぶ。更に、現存絵巻の分析から、素材

とした軍記作品にない条項を書き加えること
かしはしある事実を指摘、現実に惹起され
た事件を題材とする故にあり之に現象と捉え
物語絵巻なとの相違を明らかにした。

第二節 『平治物語絵巻』と『平治物語』

残欠を含めた五巻本の『平治物語絵巻』に
ついて、かつては金刀比羅本との近似が主張
され、近年は古態本と認定された陽明本との
近さのみが強調されてきたのに対し、詞書や
絵を再吟味、基調としては古態本系本文を踏

まえていると認めらるるが、金刀比羅本系
本文との類似性も内在させている点により、
古態本から金刀比羅本への流動過程にある本
文に依拠して制作されたものと判じた。

第三節 鳥丸光広奥書『平治物語絵巻』

東北大学附属図書館蔵模本——翻刻並に考証——

所在不明となっていた絵巻の出現に伴い、
原本では詞書が摩滅して判読不明箇所が存す
るのに対し、東北大学の模本ではそこが忠実

に写し取られていた為、翻刻し、かつ考察を
 加えた。詞書と絵の内容からして、前節で扱
 った絵巻と同様、古態本を基調としながら、
 金刀比羅本の要素を含むものとして、平家
 物語の本文とも取り込んでいることが判明
 複数巻で構想された絵巻の最終巻と目される
 ところから、物語の古形態あるいは原作の結
 尾のあり方を示唆する貴重な作品であるこ
 とを論ずる。

第二章

平家物語と平治物語

第一節 交渉関係の吟味

数多くある「平家」諸本に「平治物語」の
 影響があるかを調査、保元「平治」
 と共に琵琶の語りに供されていたと考へられ
 る語り本系のテキストにする「平治」記事
 との齟齬が認められることから、平家
 他作品へ影響を与えたものの逆の関係
 はうすく、独自の世界を保持していたと見
 る。また、読み本系の古態を残す伝本にも齟
 齬記事が目立ち、一部に「平治」から影響

か考えらるものの、成立当初におけるそれは、さして大きくならなかったのではないかと推測する。

第二節

『平家物語』における清盛の

次男基盛の消去をめぐって

『保元』、『平治』が清盛の次男を基盛とするのに対し、『平家』が一貫して宗盛と記す齟齬に着目、正しくは早世した基盛が次男だったことを証明し、かつ、社会的に宗盛を次男とする見方が早くより派生し、基盛が埋没

していった歴史的背景として、平氏内部の熾烈な嫡流抗争があったことを指摘する。結局

『平家』作者は、なまっていた宗盛次男観を利用、重盛と宗盛との対比を、嫡男対次男という分かりやすい構図で示し、『保元』、『平治』との齟齬を無視するに及んだのであろうと考へる。

第三節

『平家物語』成親事件話群の考察

『平家』諸本から保元・平治両乱に言及している箇所を抽出、そこから成親事件と語る

部分に片寄っている状況に留意し、『保元物語』の平治物語は、かゝる影響がなかつたかどうかが検証したものの。特に古態の延慶本にまでさかのぼってみると、謀叛を決定する成親の野心の描き方が、『平治』の信頼の場合に類似していたり、父清盛を教訓する為に登場する重盛の描写が、『平治』の光頼参内の場面に似ていたりするなど、影響と覺しきものが垣間見える。原作の段階から、『西物語』が参考にしたもので、はなかつたかとして、第一節の考へにやや軌道修正を加える。

第三章 文学的変貌

第一節 『保元物語』の展開と

『平治物語』

従来、『平治物語』は、『保元物語』の影響

下にありと説かれてきたのに対し、逆に『保

元』が、『平治』に影響されて変貌を遂げた要

素があることを指摘、特に義朝像の変質や、

鎌田像、信西像の描き方の変化は、『平治』

への物語的脈絡をつけようとして惹起された

ものであったと説く。二の「保元」の変化は金刀比羅本の段階で顕著に認めらるに至るのであり、両作品の相即的關係あるいは物語的連鎖の確立が二に果され、姉妹篇の様相を呈するまでになったと見る。

第二節 金刀比羅本段階の物語構造

「平治物語」が古態本の段階からこのように変貌したか否、人物造型に主眼を置いて考察したものの。物語の初めから源氏一族の動向に焦点を合わせた叙述が展開し、中でも義朝

が悲劇の棟梁として彫りの深い形象を得ている実態を解析、彼を支える人物として悪源太と鎌田とが物語的に機能させられていいると説き解く。頼朝も飛躍的にクロース・アップさるに至っており、義朝から頼朝へと継承された源氏の血脈上の正系が、物語構造の基幹にすえられ、源氏の悲劇と再興への伏線と語る文学として達成されていいると見る。

第三節 愛と死をめぐる考察

金刀比羅本では、愛する者の為に死を決意

する言動が急増していることに着目。それが
 『保元』や『平家』と相違するこの作品独自の
 現象であり、その言動の大半が、現世をあ
 まりめ、来世で愛する者と再会しようとする
 希求を本質とする。そこに激しい情念
 の発散が語られ、物語世界を悲劇的情趣で染
 め上げることもなっているのであるが、人
 々の愛の情念は、義朝と頼朝とに集中して寄
 せられており、物語の構造とも密接に関わる
 最後に、『平家物語』との異質性に言及、将
 来に開かれた頼朝の生を作者が展望したと
 ころに、異質性の淵源があると見る。

第四章 変遷の軌跡

第一節 竜神信仰の視点から

悪源太の死後に雷となり、切手であった難
 波を雷死させたという話の舞台が、古態本と
 金刀比羅本では、布引滝入る箕面滝へ移動す
 せられて、背景について、雷神と地盤を共
 有する竜神の信仰から考察を加えたもの。箕
 面の地は、箕面寺縁起より竜神信仰の濃厚な

土地であつたことが知られ、滝にある竜穴が竜宮に通じているという信仰と相俟つて、雷死の舞台をこの地に引き寄せ、難波が滝壺に落ちる竜宮まで行つてまたとする話をも付加することになつたのであつたと説く。中世にみける竜穴信仰の広がりを紹介しつつ、最初に舞台とした布引滝にも竜神信仰があつたことを推測、しかし、そこは歌枕の地としてこの性格が濃く、民間信仰色に染まつた異面滝へ舞台移動したことの中心に、貴族的発想から脱

していった物語の展開の象徴を見る。

第二節 琵琶語りとの関連

中世における平家なる呼称が、保元物語¹、平治物語²をも包摂した概念である可能性を、琵琶法師の伝書の分析から示唆、平家物語³が語り現在の立場に立ち、過去と往還する構造を通して詩的空間を創出し、之をいふ実態について、それを支える特徴的な詞章を取りあげて解明し、保元⁴、平治⁵の未熟さを逆照射する。

第三節 京国本系本文考——金刀比羅

本以前の推測を兼ねて——

金刀比羅本より後出とされてきた京都大学図書館本系列の伝本の本文を再検討、各巻をそれぞれ別種の本文であるのを接合した取り合わせ本なることを明らかにし、下巻のみが独自本文で、しかも金刀比羅本に先行する蓋然性が高いと考へる。その下巻に対応するの加山岸徳平氏旧蔵本の上巻と認められ、中巻の本文は不明なから、金刀比羅本以前の本文流動の実状を推察できる。なお、この系統に属する早稲田大学図書館本も、三巻別種の取り合わせ本であった。

第五章 展開の終局

第一節 漢籍と中国故事の攝取に見る

流布本段階作者の関心

中国関係の記事を、古態本・金刀比羅本・流布本からすべて検出、各テキストでのうに分布しているかを俯瞰し、古態本の場合には、王朝国家の秩序を重んずる文脈の中と増

補された源氏記事中に集り、金刀比羅本では頼朝による天下征覇と見通す視座から新たな工夫がこらされ、流布本校階に至ると、合戦部分に急増して軍略的関心が顕著となる。その関心は取り込んだ中国関連記事にとどまらず、様々な表現のレベルに現われていることを検証し、保元物語と流布本の性向と全く異なる点を明らかにした。

第二節

常葉八盤一像の推移

― 幸若舞曲とその後 ―

幸若舞曲で強い女性に変貌した常盤像が、どのようなに継承されていったか、その足跡をたどる。幸若の常盤物四曲から、彼女が武家の生れと規定され、意志の強さが前面に押し出されてくる実態を示し、女性の強さは幸若舞曲全体に通ずるものがあることを論ずる。後世に受け継がれた常盤像は、『平治物語』中のそれではなく、この幸若のものが、室町物語・謡曲・説経・古浄瑠璃の作品群に具体的な系譜と形象のあり方を探り、近松門左衛

門の作品もそれに基づいていことを説いて
近世文芸への流れの一端を解明した。

第三節 作品の外へ——美濃の伝承——

美濃地方に散在する金王丸伝承の中から西
寺寺のものに着目、かつて近隣にあった満福
寺には能谷直実の伝が伝わり、浄土宗布教の
為に人前で読みあげたと思わゆる文書も残っ
ているところから、宗教活動と結わつた伝
承の広がりや推測する。当該地には両者と関
係がでやすい特殊な事情が存することをも

指摘、こうした形で作品の外への展開を促す
ところに軍記物語の特性があり、そこに民衆
の人気をかりえてきた所以の一斑も見出せ
ると説く。

以上、本論文は、『平治物語』の古態本の
認定から始め、文学的性格を論じつつ、成立
から最終的展開に至るまでの作品の諸相を多
角的に究明したものである。